

静脈業界を牽引するリーダー：碇 隆司

第7回〔最終回〕 想いを引き継ぎ未来につなぐ



前回はESJとの出会いについて書かせていただいた。最終回では少し個人的なことも含めた思い出を振り返るので、笑い話として読んでいただければと思う。

東亜オイル（現 TOA シブル）時代に、碇^{せき}さんとは「いつか一緒に会社になろう」と志を共有していたことがある。ひとつのゴールとして、お互いに上場したら共同の会社にしようと言っていたのだが、リーマンショックの後に当社は衰退して結局赤字で終わってしまった。一方碇さんの会社はリーマンショックの最中においても、良い成績だったので「こうなっちゃったけれども一緒にやる未来は変わらないですよ」とお話しに行ったら「この程度の苦難にへこたれる負け犬のようなやつとは一緒にできないから出直してこい!」と追い返された。せっかく一緒になると志を合わせていたのに負け犬と言われたことが悔しかった記憶がある。碇さんは愛情しかない人だったので叱咤激励だったのは言うまでもない。



家族旅行の写真

碇さんたちとは家族ぐるみの付き合いでよく旅行に行ったが、沖縄旅行の時の忘れられない笑い話がある。（当時は笑えなかったのだが）碇さんは腎臓の調子がちょっと悪かったので、ステーキを食べるときに塩分を控えるため「塩コショウを振らないでほしい」と店員にお願いした。その言い方もちょっと偉そうに言っていたのを子どもたちも聞いていたのだが、出て来たステーキに味がなかったことに、碇さんがすごい剣幕で「味がついてない!!」とめちゃくちゃに怒ったのだ。子どもたちも私も「さっき塩コショウ振るなって言ったよな…」と思ったが、とてもそんなことを言えるような雰囲気ではなく、皆で天を仰いでしまった。「碇さんってヤバい人だな」と思ったその時の気まずい空気は、何回思い出しても笑ってしまう。



著者
株式会社アンカーネットワークサービス
代表取締役 CEO

碇 隆司

お互いの子どもが小さかったので家族連れで旅行に行くのだが、夜は決まって仕事の話になった。正しい産廃処理の在り方について激論するも、ほとんどは碇さんが先生になって、白井さんと私が生徒になっていた。子どもたちや奥様同士も仲良くしていただき、本当にたくさんの思い出がある。

今から10年前くらいになるだろうか。碇さんのお父様が亡くなられ葬儀に参加するときのこと、午後1時の葬儀に間に合う飛行機で熊本の空港に向かうはずが、羽田に向かう首都高速で事故渋滞があり、3時間以上遅れてしまったことがある。何とかたどり着き、碇さんと会えたのは碇家の親戚もそろそろ解散しようかという雰囲気の時だった。

申し訳なさそうにしている私を見て碇さんは不憫に思ったのか、いきなり自分の夢を語り始めた。「碇さん、これからは再資源化された素材をいかに次の部品の素材として使用されたか、そのエビデンスをマニフェスト化して計上する会社をつくらなければいけないだよ」と熱く語ってくれたことを、今でもの昨日のこのように覚えている。

残念ながら碇さんも60過ぎて亡くなってしまい、白井さんも58歳の若さで亡くなった。非常に残念なことだが、志や想い、お二人の魂を引き継いで行こうと思っている。

生活のためにお金を稼ぐことも大事だが、自分が何をやったか、どう行動したかという、それらの行為は全て未来につながっている。100年後の子どもたちのために環境貯金をしていくことが大事で、技術・想い・仕組みなど未来の人たちに形としてきちんと残していきたい。また、いろいろな特徴がある人と共存していくボーダレスな社会の実現のために、シニアや障がいのある人とも一緒に仕事をしてきて、今も活躍してもらっている。

私は人も物も全てに尊厳があり光だと思っている。物の命が尽きるまで輝かせていく助け合いの世界で、役目が終わったらデータ消去して次の資源につなげていく。SBTi 取得企業としての責任感やR2V3を取得している会社として、また地球環境市民としての誇りをいつでも感じられる人物を、仕事を通してつくり上げながら、社会とつながっていくことをやって行かなければならないと思っている。一社、ひとりではできないことではないので、今後もESJと一緒に歩んでいきたい。

今回、本稿の執筆にあたり産業廃棄物処理業界の歴史や碇さんとの思い出を振り返り、私自身のやるべきことを改めて認識するきっかけをいただけたことに心から感謝している。

最後に、日頃よりお世話になっているESJの皆様と認定企業の皆様に御礼申し上げ、結びとさせていただきます。

【了】